

《《》》 《《》》  
戒厳令解除後も恐怖政治  
天安門事件から一周年となった。  
多くの中国民衆は、そして全世界の  
多くのひととは、昨年の今日、中国  
の首都・北京で起こった「六・四血  
の日曜日」の惨劇を、テレビで放映  
された生々しい映像とともに永遠に  
忘れないであろう。

それは、中国にとって深刻な悲劇  
であったが、一カ月半にわたって北  
京を揺るがした、人民の波は社会  
主義諸国における民主化運動の先駆  
として、東欧諸国の一党独裁体制解  
体へと連なり、ソ連の政治改革を促  
し、さらに反転して中国の隣国・モ  
ンゴル人民共和国にまで及んだ。  
こうして見ると、天安門事件が世  
界を変えたと言っても過言ではある  
まい。中国の悲劇を貴重な教訓とし  
て、東欧ではルーマニア以外、一滴  
の血も流れることなく、歴史的な大  
変革が実現したのであった。

# 正論

東京外大教授 中嶋 嶺雄

## 合法的運動を弾圧した罪業

それにしても、澎湃として沸き起  
こった民主化運動が求めた諸課題  
は、当の中国において何かひとつで

たつて計数百人を釈放してはいるも  
の、依然として徹底した抑圧体制  
をしき、恐怖政治を断行している。  
北京大学でも新入生は石家荘の軍  
事キャンプで思想教育と軍事教練を  
強制されており、北京師範大学の学

### 「天安門事件」一周年の現実

生たちも、朝から晩まで機作案を強  
要されている。他の多くの大学にも  
国家安全部(省)や公安部(省)の  
要員が常駐し、言論・思想の自由が  
保障されるべき大学の姿とは程遠い。  
人民解放軍は、天安門事件の当事  
者、楊尚昆・国家主席兼党中央軍事  
委第一副主席の兄弟、楊白冰・總政  
治部主任の指導下で文革再来を思わ  
せる人民英雄崇拜のキャンペーンを  
展開している。

こうした厳しい状況のなかで、中  
国民民主化運動は、当面、鎮静をよぎ  
なくされているけれど、その烽火は  
決して消えていない。漸進的にはさ  
らに大きく広がりがつつあると私は見  
なしている。

それは、中国社会特有の地縁・血  
縁のネットワークや海外の華人社会  
との連携において保持されており、  
鄧小平氏をはじめとする革命第一世

代の退場が日々迫りつつある現在  
は、まさに時間とのたたかいの局面  
に立ちいたっていると言えよう。  
こうしたなかで、去る四月中旬、  
北京師範大学出身の民主化運動のエ  
ース、柴玲女史が嚴重な警戒網をか

いくぐって大陸脱出に成功  
しパリに亡命したこと、こ  
の五月初旬には香港におけ  
る中国当局の総代理人と見  
なされてきた許家屯・前新  
華社香港分社長が事実上、  
アメリカに亡命したこと  
は、中国当局にとって手痛  
い二つの衝撃であった。

北京のアメリカ大使館に  
保護を求めたままの、中国  
のサハロフ、方勵之博士夫  
妻の問題も未解決であり、  
私が去る五月初旬に平壤訪  
問の帰途、北京で会った旧  
知のシェームス・リリー米  
大使も、鄧小平氏が個人的  
にも憎悪している方勵之氏  
の問題解決には、なお時間  
がかかるかと私に語ってい  
た。

このことは、中国が東西両陣営か  
ら孤立していることを示しており、  
天安門事件のツケは、外交上もきわ  
めて高いものとなつてはなかつて  
きている。  
かつて、毛沢東思想の  
絶対化や文化大革命の混  
乱のために、世界の成長  
・発展から数十年も立ち  
遅れてしまった中国は、  
いままた歴史の転換期に  
すっかり取り残されてし  
まった現状がある。しか  
も、鄧小平以後の時代に  
再び激動をまぬがれ得な  
いとすれば、中国は、い  
まや十二億にもなんなん  
とする巨大な人口を抱え  
て、都合百年に近いロス  
を、歴史に刻んだことに  
なりはしないか。



批判的であり、東側諸国も、外交上  
は中国との正常な関係を維持しては  
いるものの、多くの国々が政治改革  
へと大きく動いているだけに、中国  
の現体制にはとうていなじみ得な  
い。  
このことは、中国が東西両陣営か  
ら孤立していることを示しており、  
天安門事件のツケは、外交上もきわ  
めて高いものとなつてはなかつて  
きている。  
かつて、毛沢東思想の  
絶対化や文化大革命の混  
乱のために、世界の成長  
・発展から数十年も立ち  
遅れてしまった中国は、  
いままた歴史の転換期に  
すっかり取り残されてし  
まった現状がある。しか  
も、鄧小平以後の時代に  
再び激動をまぬがれ得な  
いとすれば、中国は、い  
まや十二億にもなんなん  
とする巨大な人口を抱え  
て、都合百年に近いロス  
を、歴史に刻んだことに  
なりはしないか。  
これほどの代償を支払  
わねばならなかった天安  
門事件であったが、ひる  
がえつて見てみると、こ  
の事件はたんに民主化運動の高揚  
と、それへの血の弾圧というだけの  
性格のものではなかった。  
つまり、趙紫陽・前総書記の失脚  
と今日にいたるまでの消息不明にも  
明らかのように、昨年五月中旬のソ  
ルパチヨフ訪中を契機として、民主  
化運動が党内の権力闘争と結びつい  
たところに、この事件の深刻な背景  
があり、また、そのような政治危機  
を一挙に打開すべく、学生や市民に  
たいして武力が行使されたのであ  
った。  
《《》》 《《》》  
歴史はいつの日か再審へ  
しかし、民主化を求めた学生や市  
民の運動は、その基本的性格が反権  
力・反政府運動としてのカウンター  
・レヴォルーション(「反・革命」)  
であったとはいえず、実際には鄧小平  
ワンマン体制としての「人治」にか  
わつて憲法や党規約に基づく「法  
治」を求めたにすぎないのである。  
このような合法的な民主化運動を軍  
事力によって平定したところに、天  
安門事件の重い罪業が存在するのだ  
がある。  
歴史はいつの日か必ずやこの事件  
を再審することとなる。「六・  
四」一年後の現実を示している。  
(なかじま・みねお)